常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ

令和２年７月３日（金）号

◇ 目で　耳で　自然を嗜む

今年の「梅雨」明けは、例年よりもかなり早いとのこと。
「梅」の花が咲く季節どころか、「梅」の実の収穫時でさえとっくに過ぎ去ってしまっているのに「梅」の文字が使われている「梅雨」。その語源を紐解いてみた。

「梅雨」に「梅」があるのは、言葉が伝来した中国に起因している。けれども、中国から「雨期を表す言葉」として伝わったのは「つゆ」ではなく、「ばいう」。もともと「雨によって黴（「かび」：音読「ばい」）が生えやすい季節」から「黴雨」のところ、その語感の悪さから、中国で「梅」を当て字として用いた「梅雨（ばいう）」が、江戸時代の日本に伝わったとのこと。確かに今も「ばいう」とも読む。

日本に伝わった「梅雨（ばいう）」。これが「梅雨（つゆ）」となるのは、雨期による雨で木々に付く「露（つゆ）」にある。季節を象徴する「露」と、その音感の響きのよさ、日本特有の詩情から、「梅雨」に「つゆ」を当てたとの説がある。つまり、中国当て字の「梅雨」に、日本でも「つゆ」と字を当てたのである。
中国と日本の両国にまたがり、本国で醸成されたのが「梅雨（つゆ）」ということ。

さて、今年の梅雨はこれまで味わったことのない詩情を味わい、楽しむことができた。常磐の地でなければ、知ることのできなった発見が新鮮であった。

その一つは、雨の降り初めに山間のところどころから立ち上る「靄（もや）」。雨が降り、地面や木の幹葉に落ちた露が温められ、水蒸気となって立ち上るのだ。おそらく「霧」の原理だろう。遠目は靄が濃くかかり、近場では靄がはっきり見える。この自然現象が生み出すコントラストが景色を荘厳にさせている。梅雨の雨降り時、校舎から一歩出れば、こんな光景がいつでも見られる。

二つ目は雨音。雨降りの時は、体育館裏の雨音が美しい。
文字であらわすと、『さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ』…表現が難しい。
初めは水の流れる音かと思ったが、少しニュアンスが異なる。そこで耳を澄ます。
『さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ　さゎ』
落ちてくる雨が、青みと勢いを増して伸びる葉に当たって生ずるわずかな音。これが幾重にも重なって、木々がハーモニーを奏でているのだ。
雨量が異なると音が変わる。雨粒の大小で変化する常東ランドの音色。

目で　耳で　自然を嗜む。　何年もかけて溜まったストレスが抜けていくようだ。